

言語意識と言語 I

難波俊裕

(岐阜薬科大学 教養科英語英文学)

Language-Consciousness and Language I

TOSHIHIRO NAMBA

*English, Department of General Education**Gifu College of Pharmacy*

(Received September 20, 1978)

Learning a foreign language cannot but bring the learners into contact with the social consciousness in which the language has grown to be as such. Though the aim of teaching English to Japanese students is their mastery of the language, they are so interested in the comparative studies of the two languages that they often want to know differences of mental attitudes inherent in the particular expressions.

The present essay deals with some aspects of the language and its consciousness: especially what can be known through the comparison between English and Japanese. Three aspects have been examined here though more items should be picked up if English and Japanese are to be thoroughly contrasted from the viewpoint we have adopted.

Chapter 1 deals with the informative and the self-expressive speeches. It is interesting to note that Japanese tends to be more self-expressive by reducing the words which communicate facts about the object referred to. Especially 'haiku' poetry can be said to have developed from these reduction effects.

Chapter 2 is the comparative study in 'copulas' of 'be' and 'dearu'. They are usually considered as equivalent to 'be' in the English languages but here it is argued that 'de', detached from 'aru' has the role of identifying the nominative with the predicative, while 'aru' emphasizes the judgement or assertion which is already made by 'de'.

Chapter 3 tries to describe the structures of the tense schemes, and to consider the stylistic effects produced by the different attitudes.

言語は生きていると言われる。言語は文化的背景から育ち、その文化の担い手である人間のいとなみ、社会観、自然観、世界観が変れば、言語の変革を促す。と同時に、言語自体の特質がその社会の思考を制御することも事実である。言語が生きていることには、この二重の相互作用が潜在することを見逃すわけにはゆかない。興味深いことに、外国語教育の現場において、日本語の言語意識が外国語の理解の干渉となることを経験する。

英語教授は英語に習熟することを課題とするのであるが、英語表現と日本語表言との差違をも語らなければならない。本稿は、既に教室で答えた言語レベルでの対照点について、改めて整理したものである。

1. 指示表出と自己表出

一般意味論の教えるところでは、言語は世界を抽出する。言語は現実や経験について語るなのであるが、そこに構築されるものは、対象とする世界そのものではない。「机の上に本がある」と表現しても現実の机の種類や大きさを語っているわけでもなければ、その本の所有者や内容について何事も語らない。「机」や「本」という語で選び取った現実を語っているにすぎない。

言語によって認識されたものを、現実置き直してみれば、それが表現の意味であるかの如く考えがちであるが、言語による現実の再構成にすぎない。それが、言語は恣意的な記号の体系であると言われる所以である。表現される言語的世界は、個有の言語自体の制約を受けざるを得ない。日本語では、先の表現で本の冊数は不明であり机の上からの距離があるのか、机の天板に本が置かれているのかも不明のまま、慣用的に共通の意志の伝達が行われているにすぎない。例えば、英語の “There are books on the desk.” には対応し得るが、“The books are on the desk.” の意味を担うことはできない。¹⁾

表現が現実や事実に対応するものを指示表出とし、表現者の心理や姿勢に対応するものを自己表出として考えることができる。吉本隆明の説明を借りると、

人間が何ごとか言わなければならないまでにいたった現実的な与件と、その与件にうながされて自然的言語を表出することのあいだに存在する千里の径庭を言語の自己表出として想定することができる。自己表出は現実的な与件にうながされた現実的な意識の体験が累積して、もはや意識の内部に幻想の可能性として想定できるにいたったもので、これが人間の言語の現実離脱の水準をきめるとともに、ある時代の言語の水準の上昇度を示す尺度となることができる。言語はこのように対象に対する指示性と対象に対する意識の自動的水準の表出という二重性として言語の本質をなしている。²⁾

この二重性によって、言語はその単語が「類概念を象徴する間接性」とともに「指定のひろがりや厚さ」を持つ段階に達する。眼前に対象をみていなくても、特定の有節声音が特定の概念を喚起するにいたる。つまり、ソーシャルの言う、意味作用を担う所記と能記からなる記号が確立するのである。³⁾

指示表出と自己表出という観点からみると西洋絵画と東洋の水墨画の相違は示唆的である。空白が想像の自由を許す水墨画は、背景がないばかりか遠近法をも無視していて、指示表出を必要最少限に抑制する。そのため、作者と主題との関わりである芸術的主張は顕在的になる。文学において、俳句がこの省略の美学によって成立する。

例えば、芭蕉の秀句、

古池や蛙とび込む水の音

では、句作者の姿勢は「や」一語に集約され、池をめぐる情景は鑑賞者の意識が自由に喚起するにまかされる。この句は、よくいわれるように、起の静、転の動、そして、静と動との衝迫を伝える結語「水の音」とが鑑賞すべき句柄であろう。しかし、視覚的なものと聴覚的なものに鑑賞を限定できるとも言えない。指示表出を、十七字を超えて付け加え、「古池に蛙が一匹飛び込む水の音を聞いた」とでもすれば、濃縮され既にそなわっていた何ものかを失なう。「聞いた」という表現が、蛙の水音を客観的な、意識とは疎縁な、聴覚の対象として捉えるためである。作者の実存と交錯する「水の音」は消え、外に向けられている感覚に訴えるにすぎない物理的な音と聞えてくる。不思議にも、表現を補うと解釈は感覚次元にとどまり、自己表出は衰弱するのである。詠歎の助詞一語に託した意識の表出は、いかにも内包するところが多く、この句に寂滅あるいは水死を想うことも可能に思われる。「語りつくして何やある」と伝えられる所以である。

その表現が指示的意味を失う場合がある。英語の 'breakfast' には「断食を止める」という意味がもはや意識されない。同様に 'goodbye' と綴るとき 'God be (with) ye!' は殆ど意識されないであろう。日本語の「さようなら」は元来「それでは宜しくお願ひします」「それではお元気で」ほどの意味の「そうであれば」という指示的表現が残ったものであるが、訣別の哀惜を表わす自己表出の表現としてのみ用いられる。「今日は」も、後に「よいお天気ですね」の意味がともなうべきものであろうが、指示表出としては用いられず、自己表出語に転化している。親しい御用聞きなどが、「ちは！」と短絡して発音するのも自然であろう。習慣や慣用の挨拶語の多くが、指示的意味を捨て相手と自己との摩擦を和らげる潤滑油の役割を果す。どんな言語であっても、挨拶表現にあっては、指示表出よりも自己表出に重点が置かれ、響や音調の表情が定形化する。そして短絡した挨拶の方が、親近感をあらわすことになるのであろう。自己表出的衝動が感情の原形に近づくといい。

原点に帰れば、言語活動は生の意識にある衝迫を受け何事かを発するまでになったときに生じた。その発声が多分化し事象との対応関係が確立されたとき、「あ」「う」という単音から次第に複数の有声音となり、指示表出の機能を確保していったのである。個人にあっては、言語活動の起点は自己表出にあることに変わりはない。

2. 「で」「ある」

普通「です」「である」は繫辞 (Copula) と説かれる。繫辞とは

I am a boy.

The sky is blue.

などの 'be' に相当する機能を果すものであるが、はたしてそうだろうか。「ぼくは少年だ」「空が青い」が Plain Form (常体)「ぼくは少年です」「空が青いです」が Polite Form (敬体) と言われる。⁴⁾「…が青い」(常体)が終止形の形容詞で終わっている。そして「です」は本来「であります」だから常体「である」に対してその敬体として扱われる。⁵⁾実際「ぼくは子供なので、よくわからない」のように、「子供で」と表現しても、理由を表わせないことはないが、「若いので」「風が吹くので」と「終止形一の一で」と準体詞「の」を必要とする。⁶⁾

「で」の語源は「にて」であり、「だ」という助動詞は「である」→「であ」→「だ」の過程を踏んで、室町時代多く関東で使われた。⁷⁾

このように考えると助動詞「である」の「で」に断定の主張、即ち繫辞の意味が既に具わっている。⁸⁾

「で」に断定が具わるとすれば「ある」は何を意味するかを問わなければならない。「ある」の用法は、例えば、

私には子供がある。

彼はイギリスに行ったことがある。

もう三十分早く起きればと思ったことである。

などが挙げられる。「AはBである」という表現と三番目の例は同じと考えてよい。但し、「私の反省は」と補うことができるから「Aは」の部分の欠落が指摘できる。結局、この三例の「ある」は存在を表わす「ある」にはかならない。とすれば「である」と連語を形成するとき、「で」の断定に「ある」は強調を添える働きをしていると考えられる。

英語の等価表現としては、

Thus it is that Descartes can formulate a judgement of existence; I exist as a thinking being.⁹⁾

の如くであって、いずれも発話者の意味内容に対する姿勢を示している。「のである」という表現も段落の末尾の結論として命題を措定する効果があり、強調が感じられる。上記の英文で 'it is that' を除いても、指示表出が変わらず、それは自己表出の表現とのみみなしうる。

「ある」は出生、出現を語源とする動詞である。大野晋は岩波古語辞典で語源に触れ、

日本人の物の考え方では物の存在することを、成り出でる、出現するという意味で把える傾向が古代にさかのぼるほど強いので、アリの語根も、その ar であろうと考えられ、朝鮮語の al (卵) という語と、これは関係があると思われる。

と仮説を立て、別のところで朝鮮語の名詞が日本語の動詞の語幹として使われる例も多いことを挙げる。¹⁰⁾

「AがBで」という判断に、その事実が顕在的に存在するという強調がなされていると言える。

存在に関して、英語にはみられない意識が日本語にはある。無情の「ある」に対して、有情「いる」(在ル)が対応している。「居る」は語源にさかのばれば「立つ」の反対語である「すわる」であった。自己の動作については、卑下謙遜、他人の動作については蔑視の内包 (Connotation) を持つ動詞である。

原義からはなれて、存在、状態を表わすとき、有情の「いる」と無情の「ある」は動詞連用形に「て」を介して接続し、表現に微妙な陰影を与える。

壁に絵が掛けてある。(受動・完了・状態)

壁に絵を掛けている。(他動・進行・完了・状態)

「いる」は「を」と相関的で、他動詞「掛ける」の行為者の存在を暗示する。¹¹⁾

壁に絵が掛かっている。(継続・状態)

と「自動詞・て・いる」という連語で表現すれば、観察時の継続状態を表わし、行為者の行為という意識は表現から示唆され¹²⁾ない。

「ている」が行為者の潜在を含意し、「である」が行為者を意識しない表現であるという対照性は認めてよいであろう。意識するものを外化する英語では、

They have (He has) a picture hung on the wall.

A picture is hung on the wall.

のごとく対照点を明瞭に表現にあらわすことが可能である。

また、自成の観念の強い「ある」は 'have' と表現の領域を一部同じくする。

この花には花卉が五枚ある。

This flower has five petals.

しかし、この日本文の「ある」の主語は厳密には「花卉」である。この点で、英語が「have + 過去分詞」の形で経験をあらわすことと、「した・ことが・ある」「過去がある」という形で経験を示す日本語とは「ある」(be) と 'have' (もつ) を考えれば対照的であり、同時に指示的機能からみると類似する言語構造をもつことは興味深い。¹³⁾

3. 時 制

膠着語日本語は入れ子形の構造が連なって文が成り立つ。¹⁴⁾

特攻機が出発する時には、飛行場の将兵や知覧の町の人々が、人がきを作ってならば、日の丸の旗をふって見送った。¹⁵⁾

文尾の「た」が「出発する」「ならば」「見送り」の時制をすべて過去に転換する。同時に生起する事象の時制はすべて現在形で表わすのである。過去の事実を述べる場合、文尾を「た」で結べば、一連の過去の現象を叙述できる特徴がある。¹⁶⁾『知覧』のこの頁の文尾を列挙すると、「行くことになった」「町は…中にある」「と思った」「があった」「出撃した」「ためである」「つけていた」「最初であった」「となった」「見送った」の十四文中、現在形が三例あり、

「中にある」「思い出がある」は叙述時における現在を表わす。「ためである」は「出撃した」の目的をあらわすが、同文中に組みこむべきところを、抽出して一個の独立した文として取り出したものである。

日本語の判断・主張 (Predication, Assertion), 英語文法で言う平叙文は四種である。

肯定「である」「する」

否定「でない」「しない」

意志・推定「…う」「…だろう」

確認・回想「…だった」「…した」

古代には名詞、形容詞で終る陳述を過去に変える工夫がなく、漢文の訓読が始ったとき過去を表現する必要から「にあり」→「なり」, 「くあり」→「かり」の語法が成立し、過去を回想として表現することが可能になった。動詞であらわす行為の終結は「去ぬ」の「イ」を取りさったもので、自然の成り行きをあらわすのに用い、作為的意志的動詞には、「棄つ」という「捨てる」の古語をもって終結をあらわした。この「ツ」に「あり」が付き、「てあり」→「たり」となり、現代の「た」が由来する。¹⁷⁾

日本語の時制意識が文尾にあらわれる傾向は、時の前後関係を線点に配列する一つの原因となっている。そのため時制意識を空間構造において把握するとき、線状と感覚し理解する。そのためというべきか、それが原因か結果であるか断定は控えるが、文構成の点でも、副文は主文の上に立たなくてはならない。そしてこの事実が、時制意識が一層線的に構成されていると思わせるのである。

先に挙げた高木の文は、

特攻機が出発する一時一には
飛行場の将兵や町の人々が
人がきを作ってならば
日丸の旗をふり

(特攻艦を) 見送り一た。

¹⁸⁾と解析できる。終結の過去時制は「出発する」「ならば」「振る」の時制をも支配している。その結果、ヨーロッパの言語のように、個々の行為が過去性をもつものとはされない。約束事であるから、その統一が守られていればよい訳けであるが、過去を回想として捉える古代の意識はなお潜在していると思える場合がある。それが、次の志賀直哉の文体の時制をも可能にしているのではあるまいか。

頭は未だ何だか明瞭しない。物忘れが烈しくなった。然し気分は近年になく静まって、落ちつきたいいい気持がしてゐた。稲の穫入れの始まる頃で、気候もよかったのだ。

一人きりで誰も話相手はない。読むか書くかぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往来だのを見てゐるか、それでなければ散歩で暮してゐた。(中略) 小さな潭になった所に山女が沢山集ってゐる。そして尚よく見ると、足に毛の生えた大きな川蟹が石のやうに凝然として居るのを見つけることがある。(中略) 考へる事は矢張り沈んだ事が多かった。淋しい考へだつた。然しそれには静かないいい気持がある。自分はよく怪我の事を考へた。(附点筆者)

周知の『城の崎にて』の、冒頭である。怪我が致命傷に悪化しはすまいかと、不安におののきながら、小動物の死を観察し、それへの共感によって死に対する恐怖から解放される。生死は「両極」ではなく「差がない」という境地にいたる省察が主題である。主題の効果から意識的に時制を交錯させているのかも知れない。しかし、引用の始めの宿での自己観察を「落ちつきたいいい気持がしてゐた」としながら直後に山狭の散歩気分を「淋しい考へだつた。然しそれには静かないいい気持がある」と現在時制によって表現している。むしろ主題とは無関係である、文学作品によくある

時制意識の一例とみるべきであろう。

一方、高木の文体は、記録文学には多くみられるもので、過去形の叙述をきちんと守っている。英訳すると、志賀の文体も高木の文体と同様に過去の事象は過去形で表現されることになり、文体の此の点の相違は喪失する。¹⁹⁾

ヨーロッパの言語では定動詞 (Finite Verb) は主語と述語との一体性を要求するが、日本語にはこの拘束がない。²⁰⁾ 其上、例えば英語の定動詞には個々の時制を附与しなければならないから、過去時制に限らず、未来時制さえも動詞の時制感が純粹に未来を示指 (denote) する。日本語は、外国語の訳語として「でしょう」「だろう」に未来を意味させているが、原義は推測であり、むしろ、未来を示す副詞と現在形で未来事象を表現するのが常例である。

両者の時制意識の相違を、この点で捉えれば、三時制言語に対して日本語は二時制の言語という見方も成り立つ。²¹⁾ しかも、西欧言語にあっては、三種の時制は三層として理解されることは、線的時制意識と大いに異なるところである。其上、各層それぞれは、丁度現在を中心に過去と未来があるように、完了相、未来相を分けて表現するから、三層で構成されているかの如く思える。時制が、このように二重に三層に分割されているため、地質学の捉える地層のように、時間が層をなつて堆積しているかに認識される。実際、ソシュールが通時的 (diachronical) と共時的 (synchronical) とに、歴史的 (historical) 側面と記述的 (descriptive) と呼ばれる言語研究の二面を定義したとき、「時」を流れてなく堆積した水平な地層として想定していたと思われる。

三層の空間として時を意識するのはギリシヤに発することであるらしい。ヘブライ人の時間意識についても、「話者の意識が行為を決定する固定点である」²²⁾ と言われる。

「た」によって過去を確実にゆるがないという認識を獲得したとき、現代日本語は二時制を確立した。その際確定的動作を示した「ぬ」「つ」は「てしまう」に集約され、完了相の一つを形成した。²³⁾ (この項完結)

注

1) 日英両語の比較を中心に考えたいので、厳密な言語学に拘らず論ずる。言語の定義も次の *Webster III I. D.* の程度で考える。‘The words, their pronunciations, and the methods of combining them used and understood by a considerable community and established by long usage’

2) 「言語の本質」『言語にとって美とは何か』全著作集 6, pp. 10—55.

3) ソシュール小林訳『一般言語学講義』岩波書店 (1940, 1972) pp. 95—101.

吉本 前掲書、「有節音声は、よりおおく意識の自己表出としてのアクセントで発せられるものと、指示表出として発せられるものとの傾かざるをえない。(中略) 時枝誠記が『国語学原論において詞と辞として分類し、三浦つとむ『日本語はどういう言語か』で客体的表現と主体的表現として大別したものはこれに関連する」p. 45.

4) Hideichi Ono, *Japanese Grammar*, (Hokuseido, 1973) pp. 31—2.

三上章は「だ」「です」を *monogeme* と考えようと提唱し、次のように表示する。指示表出性は同じだが自己表出性が異なるからである。

	普通体	丁寧体	御丁寧体
文章体	デアル	デアリマス	×
談話体	ダ	デス	デゴザイマス

更に将来の傾向と学習指導のポイントについて「これからの敬語法においては、丁寧体が標準体となり、普通体は親近体ともいうべき性質のものとなろう。(中略) スタイルの重要さには多分変りがないと思われる。中等文

法が生きた文法となるためには、少なくとも初の三分の一ぐらいは、スタイルの変換や用法の練習に当ててもよい』『現代語法序説シンタクスの試み』くろしお出版(1972)

5) 『改訂新潮国語辞典』久松潜一監修「です(助動詞)語源未詳。「で候」の転、「でおはす」の転、助詞「で」に文語サ変活用動詞「す」の付いたもの、などの説がある。口語では「でしょ・でし・です・です・〇・〇」と活用。体言、形容詞、ある種の助動詞の終止形、助動詞の終止形、助詞「の」などに接続する」

6) 江戸時代の口語などでは、この「の」を省略した。「で」に強勢があり、音韻の結合が行なわれたことが推測できる。

7) 『岩波古語辞典』岩波書店(1974)

8) 「である」の古形「にあり」が生じたのは奈良時代である。それ以前は「肯定判断を表わすにはゾ(さらに古くはソ)を使っていた」大野晋『日本文法を考える』岩波新書(1978) pp. 119—120.

「で」は「ずて」「ずして」の短縮である場合もある。「立起き上り給はで」「むごに云渡らで」この場合接続は未然形である。

9) F. E. Sutcliffe, 'Introduction' to Descartes: *Discourse on Method and the Meditations* (Penguin Classics) (1968, 1977) p. 19.

10) 『日本語の起源』岩波(1957, 1976) p. 211.

11) 「を・他動詞連用形・て・いる」に「今」のような時点を示す副詞を添えると、進行相があらわれる。「今宿題をやっている」「自動詞・て・いる」は殆ど進行相しかあらわさないが、「死んでいる」の例もある。

12) 「掛かる」(kaku+aru→kakaru)は他動詞「掛ける」の対となる自動詞である。「絵が掛けられてある」と受動態を組み込むことも可能である。

13) 英語の完了形は I have a book written. →I have written a book.の経過で完成した。「be+過去分詞」の英語の受動態の基本形も、「動詞・ある」で受動形を作る日本語と、構造的に、全的ではないが、類似があると言えよう。

書く (kaku) to write

書かる (kaku+aru→kakaru) to be written

書かれる (kaku+aruru→kakareru) to be written

14) 時枝誠記『国語学原論』岩波書店(1941, 1976) pp. 224—9.

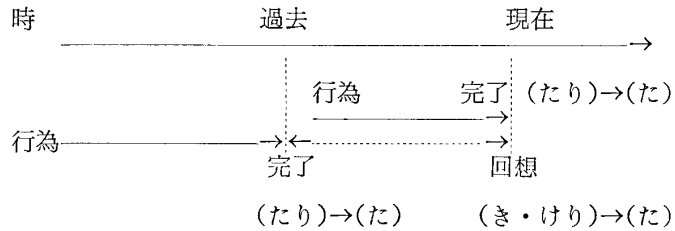
15) 高木俊朗『知覧』角川文庫 p. 3.

16) 厳密にいうと、英語の時制の一致に似た一致の法則が日本語にもある。引用の「出発する時」を「出発した時」とすれば、特攻機の出撃が1回限り限定的にあったことを示唆する文に変わる。つまり、意味内容から必要として時制の一致が行なわれるので、英語のそれとは似て非である。井上和子『変形文法と日本語』下巻、「時の解釈」大修館(1976) pp. 169—99.

17) 大野晋『日本語の文法を考える』岩波新書(1978) pp. 119—30. 「キ・ケリ」が記憶の有無を表わしていたが、過去を記憶回想と考える意識が廃れ「過去を既に確実に存在したものとして把握する仕方が広まった」時「たり」が「き」「けり」を亡ぼし領域を広げた。現代語の「た」は「過去に関する判断とともに現在の確定・確認を表わす」(同上, p. 129)

岩波古語辞典(pp. 1439—40)は『「き」「けり」は回想の助動詞である。多くの文法書では、これを過去の助動詞という。(中略)日本人は、動詞の表わす動作・作用・状態について、それが完了しているか存続している

か、確認されるかを「つ」「ぬ」「たり」で言い、ついで、それらに関する記憶の様態を「き」「けり」で加えた』
図示すると次の通りになる。



- 18) 「特攻機が出発した時」と「する」を置き換えることができない。
- 19) 日本語の過去時制には過去以外に「心理的過去」「想起と主張」「儀礼的質問」などに分類される表現にも用いられる。形式的過去は英語の仮定法にもみられる。三上章『現代語法序説シンタクスの試み』pp. 220—7.
- 20) 例えば、北原保雄「文の構造」『岩波講座日本語』Vol. 6, (1976) pp. 79—81.
- 21) 三上, 前掲書 pp. 162—7, pp. 219—232.
- 22) トールレイツ・ボーマン植田重雄訳『ヘブライ人とギリシャ人の思惟』(1959) 大野『日本文法』p. 143. 「セム人は語者の意識が行為を決定する固定点なのである。この場合行為がすでに完了しているが、あるいはまだ発展の途上にあると考えるか、二つの心理的な可能性がありうる。完了しているとみれば完了体であり、発展の途上にあるとみれば未完了体になる」
- 23) 大野 同上 p. 144.